詩人・安西　均（あんざい　ひとし）

◀市民図書館前に建立された安西均の「天拝古松」詩碑（平成６年11月建立）

筑紫野市民図書館前庭に建立された「天拝古松」と題した詩碑をご存じですか。この作者が詩人安西均（本名＝やすにし）なのです。

安西均は大正７年３月15日に福岡県筑紫郡筑紫村（現筑紫野市筑紫）に生まれました。地元の筑紫小学校から福岡師範学校（旧制）に学び教師の道をめざしたようですが中退。新聞記者、出版社などに勤務しながら現代詩壇で活躍、上京後も福岡の同人との交流を深め、詩集だけで十数冊、著作は膨大な数になります。日本現代詩人会会長、日本文芸家協会会員、平成５年度に勲四等瑞宝章を受けました。しかし同６年２月８日、東京で病死しました。享年75歳。

安西均の文学への道は、師範学校に入って本格化したようで、「創作童話」にうちこみ学友と地域の小学校を熱心に巡回していた話があります。

当時は、日中戦争の緊迫した世情の中でも文学への志を燃やして上京、先輩を頼って「同人誌」活動を始めています。

昭和18年、25歳で朝日新聞福岡総局記者となり戦後再上京、昭和34年（同東京本社学芸部）の退職まで敗戦のドン底から復興に向った社会の姿をジャーナリストの目で鋭く追求しています。そのかたわら故郷福岡の同人グループとの交流を忘れていません。地元では戦後すぐ「九州詩人」の編集委員となり、文壇の登龍門だった「九州文学」にも発表、このころ作家火野葦平、劉寒吉、野田宇太郎などとも知り合っています。

中でも久留米の詩人丸山豊が主宰した「母音」には福岡師範の先輩岡部隆介（筑紫野市永岡出身、現直方市在住・詩人）の紹介もあって作品の発表を続けました。安西は「丸山豊を師匠としていました」と同人に語っています。

東京では詩人・作家伊藤桂一などのグループ誌「山河」高田敏子主宰の「野火」のほか数多くの詩誌にかかわっています。

死を前に絶筆ともいえる詩集「指を洗う」＝平成５年刊＝は「何だか自分の屍体を洗ってゐるみたいな気分だな」、と献体を告げて再入院する前夜の入浴に際して、〝生の時間〟を、鋭く詠んでいます。

▲昭和16年、北原白秋が来福した折り、原田種夫の出版記念会に出席した安西均（中列、左から２人目／岡部隆介氏所蔵）

▲安西均の作品を収録した詩集と同人誌

安西均の詩作にふれてみましょう。

冒頭の「天拝古松」は詩集「金閣」＝昭和53年刊＝など選集に掲載されています。天拝山の山頂にたつ老齢の松が、昭和５年の台風で倒れたのを惜しみ、「巨いなる鳥の　飛びたちかぬるすがたして　千とせ経し松の見えしが」「よるべなき精霊のごとく　かなしびの嵐にまぎれ　そは　いづかたとなく天翔りたるにあらずや」と故郷の老松によせて深い憧憬の言葉を綴っています。

現代詩花椿賞の詩集『暗喩の夏』＝昭和58年刊＝は秀作の一つ。

うつむいて煎り豆を拾っているすきに　世界が一瞬にして変わることがあるのだ（中略）
娘たちは腰をかがめて豆を探しつづけたさうだが
やがて頭をもたげたとき見たのは
《乗客も電車も窓外の光景も》焼けただれ
《無傷なのは二人だけだった》といふのだ
広島で女学生だったひとが書いている
われらが〈生〉にとって
つねに〈暗喩〉といふものは
一瞬だけずれる閃光に似ているが
もし地獄とやらにも微笑があるとするならば
このやうなをかしさに違ひない（「暗喩の夏」）

原爆に重ねて戦争を鋭く告発しています。その説得力はすさまじく、磨き抜かれた詩的技倆は心を強くゆさぶります。

自由詩または散文詩が日本詩の世界での位置をしめたのはそう古くありません。特に戦後は言葉の複雑さと早いテンポの作品が目立ち感性だけが先走ったものが多いようです。

それに比べると安西均の姿勢は、歴史を新しい感覚でとらえ、過去を現代に生かして語ることで、詩そのものの生命と機能一現代詩の魅力といったものに迫ることができます。

「新古今集断想　藤原定家」と題した作はまさに、そのものです。

貴族の青年は橘を噛み蒼白たる歌帖（カイエ）を展げた
烏帽子の形をした剝製の魂が耳もとで囁いた
灯油は最後の滴りまで煮えてゐた
直衣の肩は小さな崖のごとく霜を滑らせた
王朝の夜天の隅で秤は徐にかしいでいた
＝以下略

詩集『夜の驟雨』＝昭和39年刊＝には「頬白城記」と題した一篇があります。出生した“筑紫”の地名にこだわり、古代文献や古い小字名を追いながら歴史を散歩しています。単なる詩人ではなかった安西均の幅広い世界を読むことができます。　（村里徳夫）

注＝掲載した詩文は原文のまま。敬称略。

95. 3. 31. 発行
97. 8. 1.
00. 3.　改訂　8,000 SYUEISYA